
ラヴィング-純白-

むぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラヴィング - 純白 -

【Nコード】

N7467X

【作者名】

むぎ

【あらすじ】

軍を退役してから六年後、ハイン・マグダラスは神官になり教会に勤めていた。ある日、元部下のメイベル・アイリーンが結婚の報告をしにやって来たが、あまり幸せそうな様子ではない。ハインも祝福するが心の中で違和感を拭えなかった。

教会での建国記念パーティーの後、ハインは後輩のテレゼと二人きりで酒を交わし、テレゼに告白される。テレゼにつめよられてハインはようやく自分の気持ちに気付き、メイベルの結婚を阻止するために動き始める。

ラヴィングより、ハインの未来の話。

2010年頃書いたものです。手元では完結しています。
pixivに掲載予定、自サイトに掲載予定です。

「昔々、あるところに一人の少年がいました。少年は実の親に売られ、ここ、元スラムに逃げてきました。少年はスラムで妹と弟を養っていくため、軍人の手伝いを始めました。」

何？ ああ、その時はまだ、隣の国と戦争をしていたんだ。

少年は青年になって、軍人の反感を買って、妹を殺されてしまいました。

何でかって？ 青年が気に入らなかつたから、腹いせにだろう。

もう少し大きくなれば、分かるかもしれない。

青年は妹を殺した世界を壊そうと誓いました。

よく分からない？ まあ、戦争をしていなければ、妹は死ななかつたということかな。

青年は軍に入り、カタリナを召喚しようと頑張りました。人もたくさん殺しました。

悪いことだつて？ そう、人を殺すのはよくない。だからお前達は殺してはいけない。カタリナ？ うん、カタリナはお前達もよく知ってるあのカタリナだ。

青年はカタリナを召喚しましたが、死んだ妹に会い、刺されて大怪我をしました。

何で死んだ人が出てくるって？ それは俺にも分からない。創造主の力だろう。

それで、大怪我をした青年は体が治つて、この世界が好きだったのだと、分かりました。めでたしめでたし。

何？ つまらないか。でもお前達はこうならないように、よく覚えておけよ。」

俺は高い陽の光を受けて輝く杖で、右足を叩く。教会の裏庭につながる階段で、俺を囲んで座る子供達は、ふくれつつらで俺を見上げていた。

「もう、それなんでもきいた」

俺の隣に座っていた六歳くらいの少年が言う。

「そうだな。でも何度も言わないと忘れるだろ」

「わすれないよ」

「じゃあ大人になるまで覚えておけよ。忘れたら怒るぞ」

「マグダラス司祭」

不機嫌に抑えられた女の声が聞こえて、振り返った。

白い女性用の法衣が陽の光を返して眩しい。長い黒髪は全てヴェールの中にしまっていて、大きい緑色の瞳が細くなっている。女というより、少女は、子供達と同じふくれつつらをして階段を一段下りる。

「その話はまだいいって言ったじゃないですか。もっと楽しくなるお話をしてあげて下さい」

「楽しい話はお前が担当だろう」

俺は笑う。

「子供達が真似したらどうするんですか」

「反面教師だ。真似はしないように言っている」

少女は腰に手をあてて息を吐いた。

「お客様、アイリーン大尉です」

俺はかたわらの少年の頭を撫でて、杖に右半分の体重をかけて立ち上がった。少年が髪を押さえたのを見て、笑った。

礼拝堂に杖の音が響くと、祭壇の方に座っていた後ろ姿が振り返る。頭の後ろで一つにまとめた波打った黒髪が揺れて、黒い軍服の女は立ち上がる。

「お久しぶりです。一年振りくらいですかね」

隣まで歩いていくと、長椅子を勧められた。

「別に、立つてるだけなら問題ない。そこまで老いてない」

「今いくつでしたっけ」

「三十五だ」

メイベルは思い出したような声を上げた。

「私と同じでしたね」

柔らかく微笑む顔は、あまり衰えた感じはしない。相変わらず見た目で兵士達を騙し続けているのだろう。メイベルは俺の横に来て、後ろ姿をのぞきこむ。

「何だ」

「いえ、大佐が白い服を着てると違和感が。何度見ても慣れないです
すね」

「いい加減、俺は大佐じゃないぞ」

「だって他の呼び方が思い付かないんです」

「名前で呼べばいいだろう」

メイベルは一瞬目を細くして、視線を横にずらす。

「何かなれなれしくて嫌です。かといってさん付けじゃ気持ち悪い
し」

「安心しろ、態度が充分なれなれしいから大丈夫だ」

「喧嘩売ってますか？」

「事実だ」

メイベルは笑う。

「人としては尊敬してますよ」

「今もか？」「ええ」

メイベルは頷く。

「それは礼を言う。それで、何の用だ？」

メイベルは珍しく視線を泳がせて、不明瞭なうなり声を上げた。

「あのですね、実は結婚することになりました」

頭の中に、先月ここで行われた挙式の様子が思い起こされた。純白のドレスに身を包んだ花嫁と、目の前のメイベルが結びつくのに少し時間がかかった。

「それは、よかったな。相手は誰だ？」

「フォレンティア大將です」

坊主頭で、俺にメイベルと結婚しろと言った男の顔が浮かぶ。大

将とメイベルは親子程歳が離れていたと思うが、元帥は認めただろうか。

「冗談ですよ、そんなに真剣な顔しないで下さい」

「何だ、嘘をつくな、紛らわしい」

「デビース大尉です。覚えてますか？ あの同室だった」

全部冗談だったのかと思ったが、結婚のことは本当らしい。六年前、軍にいた頃の記憶を思い出す。

「ああ、軍曹か。出世したな」

「大佐がいる時も一応中尉でしたよ。興味なかったんですね」

確かにあの男は真面目すぎて口うるさかったし、堅実とか実直とかいう言葉が似合いそうだから、メイベルののんびんだらりと暮らしたいという希望には合っているのかもしれない。

「退役するの？」

メイベルは腕を組んで目を細くする。さつきから珍しい顔しか見ていない。

「迷ってます」

「のんびんだらりと暮らすんじゃないかったのか」

「毎日のんびんだらりとしてたら暇かなと思って」

結婚を控えた女は気分が塞ぐことがあるらしいから、それなのかもしれない。

「報告なら手紙でもよかったが」

「招待状は後で送りますけど、取り急ぎ報告だけ」

俺は眉を寄せた。

「俺も招待されてるの？」

メイベルは当たり前のように頷く。

「俺は反逆者だぞ」

「いいですよ、今は神官だし。元帥もそんなこと気にしませんし、私に文句を言える人もいませんし。大将も喜びますよ」

多分、嫌な顔をする奴の方が多いだろう。

「でも、大佐今割と伝説ですからね。反逆者で、創造主に殺されか

けて、奇跡的に命を取り留めて今は神の領域に入ってるっていう」
「何の噂だ」

「軍内に流れた噂ですよ。大佐を知らない新人程、興味を持ってますよ。生きながらにして神ですよ、神」

「一体どんな噂だ。俺は息を吐いた。」

「それはともかく、出席しろということか？」

「ええ、もちろん」

わざわざ自分が問題を起こした場所へ行くのもどうかと思うが、この分だと断れないか、仕方ない。

「分かった」

メイベルは満足したように手の平を打った。

「それでこそ大佐です」

メイベルは嬉しそうに、笑う。

「一つ聞くが」

「何ですか」

「お前、今幸せか？」

紫の目が開いて、少しだけうつむく。

「普通です」

「政略結婚か、ってそんな訳ないな」

別にメイベルが政略結婚させられる必要はなく、むしろデイビス大尉が地位目当てになるが、あいつはそういう奴でもない。

「まあ、デイビス大尉にプロポーズされまして、嫌いではないし、時期も時期だし、あまり言いたくはないんですが立場的なものもありまして、受けることにしました」

俺は返事をして、口を閉じる。少し聞きすぎたか。

「結婚するなって、言っただけじゃなかったか？」

笑って、言った。メイベルは目を開いて、拗ねた子供のような顔になった。

「よく、分かりません。そうなんでしょうか？」

「俺に聞かれても分からない」

「でも、そうしたら」

紫の目が俺を見て、それた。

「何でもありません」

喋らなくなると、何も聞こえなくなった。子供達の声も聞こえないから、あいつがきつと話を聞かせてやっているのだろう。

「桜でも見に行くか？ 今が一番綺麗だぞ」

メイベルは微笑んだ。

「いいですね、行きます」

「テレーゼに伝えてくる」

裏庭の方へ杖を進めると、呼び止められた。振り返ると、メイベルは真剣な顔に戻っていた。

「大佐は、今幸せですか」

俺は自然と、笑っていた。

「あの時から、俺はずっと幸せだ」

残光のように焼き付いた、涙を流して微笑むミアの顔を、思い出した。

今夜は晴れているが、月がない。花壇の間を縫うように、何匹もの夜光蝶が淡い光をまとって飛んでいる。

「お疲れ様です」

座っている階段に手をついて振り返ると、テレーゼが軽やかな足取りでこちらへ歩いてくる。腕には細長い瓶を抱え、グラスを二つ持っている。白い法衣はそのままだが、ヴェールは外していて、長い黒髪が歩く度に揺れる。テレーゼは当たり前のように俺の隣へ腰を下ろした。

「シャンパンか」

「お爺様のコレクションからくすねてきました。せっかくのパーティなのに、私達だけお酒を飲んじゃ駄目なんて、不公平です」

テレーゼは頬を膨らませる。

数時間前まで礼拝堂で行われていた建国記念パーティでは、大人

は大いに飲み、子供は大いに食べ、楽しんでいた。ただ、準備にあたった俺とテレーゼ、もう一人年上の司祭は酒を飲むと言われていたのだ。

テレーゼは祖父がこの教区の司教で、裏の手を使えば何とでもなりそうだが、俺より後に入ってきたので一応後輩という扱いになっている。

テレーゼは手際よくシャンパンを開けてグラスに注いでいく。次々と泡が弾ける音が耳に心地いい。
「どうぞ」

俺は礼を言つてグラスを受け取った。一口飲むと、軍の建国記念パーティーでもよくシャンパンを飲んでいたことを思い出した。国の公式行事として建国記念パーティーが再開されたのは戦争が終わってからで、俺が入隊した年だったからよく覚えている。

「平和はいいな」

呟くと、テレーゼはシャンパンを一口飲んで、笑い出した。

「軍人出のマグダラス司祭が言うとおかしく聞こえます」

「一口で酔っ払ったのか？」

「そんな訳ないじゃないですか。だって軍人と神官は正反対ですよ。表向きは」

この国の政権を握っているのは軍で、神官は教義上は軍人と相容れないが、位階の高い者は軍に協力し、かなりの見返りを得ている。

まあ、退役した今はあまり関係のないことだ。ふと、黒い軍服の、紫の目を伏せた女の姿が浮かんだ。

「女は結婚前に気分が落ちこむものなのか？」

テレーゼは眉をひそめる。

「突然ですね」

「いや、先月の花嫁はもつと幸せそうに見えたんだが」

テレーゼは眉をひそめたまま首をかしげたが、思い出したように大声を上げた。

「アイリーン大尉ですか？」

何となくすぐ返事をするのがはばかられて、俺はシャンパンを飲んだ。

「結婚するんですか？」

テレーゼの声が心なしに切迫したのに驚いて、返事をした。

「ああ」「いつ？」「それは、聞かなかつたな」「聞かなかつたつて、出ていつちやうんですか？ また軍人に戻るんですか？」

テレーゼが俺に詰め寄ってきて、俺は体を引いた。

「何の話をしてる？」

「だって結婚するって」

「俺じゃないぞ？ アイリーン大尉と、軍にいる大尉だ」

テレーゼは大きな緑色の瞳をいっぱい開いて、気付いたように体を離れた。

「びっくりしました。マグダラス司祭が結婚するのかと思いました」

テレーゼの頬は、暗がり隠れて分かりにくかったが、多分酒のせいではなくて、上気していた。

「俺が結婚するとまずいのか？」

テレーゼは小さく肩を震わせて、俺を見上げる。緑色の瞳が、細められる。

「困ります。私は、マグダラス司祭が好きなんです」

俺は、少しの間、緑色の目を見つめていた。

「それは、ありがとう」

緑色の目が俺を鋭く射抜く。

「冗談じゃありません」

「酔ってるのか？」

「そんなにすぐ酔う訳ないでしょう」

俺はテレーゼの瞳から、目をそらせなかった。

「今いくつだ？」

「二十歳です」

「お前から見たら十五も上だぞ」

「そういう問題じゃないんです」

必死に俺を見上げる顔が、少しだけ、ミリアと重なって見えた。

「お前のことは、妹みたいに思っていた」

テレーゼの唇が引き締められて、開く。

「マグダラス司祭はアイリーン大尉が好きなんだと思ってました。でも、違うんでしょう?」

突き刺すような声だった。俺はテレーゼから目をそらす。

「何で、そう思う?」

「だって好きなら、止めてるでしょう?」

俺は、止めなかった。メイベルへの感情が何なのか、分からない。ただ、ずっと沈んだ顔をされていると調子が狂うし、幸せになっただけほしいと思う。

「私のことは、好きじゃないんですか」

テレーゼの緑色の瞳が、震えている。

「人としては好きだが、愛してはいない」

「アイリーン大尉のことは?」

喉が詰まる。メイベルのことは好きだ。でも、これは、恋愛感情なのか?」

「分からない」

テレーゼの瞳が細くなる。

「そんなのずるい、そんなのじゃ諦めきれません」

高い声が耳に響く。

「分からないんだから仕方ないだろう」

テレーゼは泣きそうな目で俺を睨んで、俺の胸倉をつかんだ。淡い花の香りが空気の流れに乗って、唇が触れ合った。

頭の中に、昼間桜並木で交わした会話が蘇った。あの時の感情が頭の中に、体いっぱい広がった。

触れている部分が離れると、テレーゼは涙を流していた。緑色の瞳を歪めて、しゃくりあげる。顔を伏せて泣き出したテレーゼの背を、軽く抱き寄せてさすってやると、泣き声は更に激しくなった。

「嫌か」

テレーゼは涙をいっぱいためた目で俺を見上げる。

「こんな時だけ優しいなんて、ずるい」

高い声は崩れて聞き取りにくく、テレーゼはまた顔を伏せた。

「少し、目が覚めた」

テレーゼは答えなかった。ただ、少しだけ顔をあげて俺を見た。

「久しぶりに、賭けをしに行ってくる」

テレーゼはしゃくりあげたまま、わずかに首を傾げる。

「今なら好きなだけ甘えていいぞ」

「甘えません、馬鹿」

テレーゼは泣き声で叫んだ。俺は笑って、触れている熱い背中を軽く叩いてやった。

強い風が吹いて桜の花びらが吹きつけてくると、メイベルは目を伏せて、頬にかかる髪を押さえた。

「嫌ですねえ、人前でキスするとか」

メイベルは目を閉じて渋い顔をする。

「練習しておくか？ 相手になるぞ」

「嫌ですよ」

「それは残念だ。最後にしたのはいつだったかな」

記憶をたどるが、子供の頃にさかのぼっても、まともなキスをした記憶がほとんどない。軍では女性兵からアプローチを受けたことはあるが、手は出していない。昔から、人を好きにならなかったせいかもしれない。

ふと、執務室で両手両足を縛った女とキスをしたことを、思い出した。

「最後にしたのは、アイネだな」

「外道ですね」

「何とでも言え。お前も結婚する前に一度くらいしておかないか」
立ち止まると、メイベルも立ち止まった。すぐに返事があると思っていたのに、メイベルは先程と同じ、目を閉じて渋い顔をしてう

なっていた。

『しょうがないですね、じゃあ練習ということ、一度くらいならメイベルは渋い顔のまま恥ずかしがる様子もなく、言った。まさかそんな答えが返ってくるとは思っていなかった。俺は返事ができなかった。メイベルは真顔で俺を見つめていて、急に頬を緩めて、吹き出した。』

『大佐のそんな顔、初めて見ました』
『どうやらつばに入ったようで、メイベルは腹を押さえて笑っていた。』

『そんなにおかしいか。というか、からかったのか』
『こんな返し方をされたのは初めてだったので、気恥ずかしさと戸惑いが入り混じる。』

『いえ、本気でしたけど、おかしくて』
『メイベルは息を整えて俺に向き直る。』

『逃げるものは追いかけるのに、追いかけると逃げるんですね。猫みたい』

『どんな顔をすればいいのか分からなくて、俺はメイベルから顔をそらした。』

『で、しないんですか』

『お前、何でまったく恥ずかしそうじゃないんだ？』

『練習だって言ったじゃないですか』

『メイベルはからかっている風でもなく、俺の顔をのぞきこんでくる。』

『いい、興をそがれた』

『メイベルは意外そうな声を上げて、得意そうに、笑う。』

『守りに入ってる大佐なんて、大佐らしくないですよ』

『風が吹いて、メイベルの軍帽が宙に舞った。メイベルは慌てる風でもなく、飛んでいく帽子を見上げる。』

『大佐は最後まで帽子嫌いでしたね』

『思い出したように笑って、駆けていった。』

遠ざかる後ろ姿を目で追いながら、こういう風に二人で出歩くのも最後になるのかと思った。メイベルはいいと言うかもしれないが、世間の目からはそうもいかないだろう。胸のあたりに針が刺さったような、それでいて心臓の下半分がなくなったような感覚にとらわれた。

今なら分かる。この感情が何だとしても、俺は、メイベルが必要なのだ。

硝子張りのエレベータに背をつけて、遠ざかっていく地上を見ていた。ずっと前にも、同じ景色を見た。ただ、今は案内役の兵士がいる。あの時の俺の住処は地上から遠く離れていて、今から向かう場所は更に上にある。

涼しげな機械音と共に扉が開いて、俺は案内役の兵士の後をついてエレベータを降りた。杖をつく音が床から壁に響いて消える。客としてまたここに来るとは、思わなかった。廊下の片側は一面硝子張りで、青空の下、首都の街並みが一望できた。

兵士は重々しい両開きの扉の前で立ち止まって、ノックをした。「アイリーン元帥、ハイン・マグダラス司祭がお見えです」
中から声が聞こえると、兵士が扉を開く。

硝子窓を背にして、机の向こうにアイリーン元帥が座っていた。もう高齢のはずだが、坊主頭に白いひげは変わっておらず、老いた感じもない。部屋に進むと、背後で扉が閉められた。

「お久しぶりです。お目通りいただけまして感謝申し上げます」
アイリーン元帥は立ち上がって、隣の三人掛けソファに腰を下ろす。

「足に残ったのか」
元帥の視線が右手の杖に移る。

「生きているのが奇跡なので」
元帥は手で、俺に向かいに座るよう促す。俺は硝子の机を挟んで、ソファに腰を下ろした。

「用件は手紙で大体読んだが」
「お手間をおかけします」
「お前がかしこまっていると気色が悪い」
久しぶりの駆け引きに、笑いがもれた。

「それでは、手短かに。カイザー・デイビス大尉との決闘をご承諾い

ただけますか」

元帥はまったく表情を変えず俺を見ていた。

ノックの音が静寂を裂く。「ベルガ・フォレンティア大将、参りました」扉の向こうの声に、元帥が投げやりに返事をする。「入れ」
「失礼致します」

扉の向こうから現れたのは、丸坊主に口ひげの、まごうことなきフォレンティア大将だった。大将は元帥に目礼してから、俺の方を見る。

「久しぶりだな、マグダラス」

何となく、子供と久しぶりに再会した親のような顔をしていた。

相変わらず変なタイミングでやって来る男である。

「大将もお元気そうで」

俺は立ち上がって大将と握手した。

「軍に戻る気になったのか」

「見ての通り、今は神官ですよ」

「お前が白い服を着ていると違和感があるな」

「よく言われます」

元帥がソファに掛けるように言う。俺と大将が横並びに座ると、見計らったように、続きの隣の部屋から秘書がお茶を持ってきた。秘書も男なので、華はまったくくない。教会にも女がないのが当たり前だが、普段テレエゼがいるだけに、このむさ苦しさは懐かしく感じる。

カップが机に置かれるのに合わせて湯気がゆらめき、紅茶の香りが広がる。ミルクポットと砂糖瓶が机の真ん中に置かれ、秘書が去っていったから、元帥は紅茶に手を伸ばし一口飲んだ。

「マグダラス司祭、先程の件、理由を言え」

あまりにも自然に言われたので、聞き逃しそうになった。俺は紅茶に手を伸ばして、一口飲んだ。

「メイベル・アイリーン大尉の結婚に反対だからです」

「メイベルと結婚したいのか？」

「認めていただけののなら」

元帥は空気の流れを断ち切るように、紅茶のカップを持ち上げる。

「アイリーン大尉に、直接言ったのか」

「それは、まだですが」

言っている途中で、俺は糸が繋がったように、心の中で呻き声をもらした。

「失念していました」

そういうことか。メイベル本人に先に言っておけば、決闘など持ちかけなくても済んだかもしれない。

だが、断られたら、どうする？

聞き慣れた笑い声で、意識が現実に戻される。大将は笑いながら紅茶のカップを持ち上げた。

「世界の滅亡を画策した男も、色恋沙汰には敵わんか」

喉が詰まる。何と言えいいのか分からなかった。

「失礼を承知で言わせてもらえば、私はアイリーン大尉とお前が結婚する方が自然に思える。デイビス大尉には悪いがな」

大将は紅茶を飲んで、言った。俺は湯気の立つカップを見つめた。結局、手順は同じはずだ。デイビス大尉との結婚が破棄されたとしても、相手が俺では軍の連中が納得するとは思えない。決着をつけるには決闘が一番だろう。メイベルが反対しても、俺の答えは一つだけだ。

「決闘の意思を変えるつもりはありません。アイリーン大尉に反対されてもです」

俺は元帥を見つめる。元帥は表情のない瞳で、俺を見つめ返す。

「お前に決闘を申し込む権利はない」

「なぜです」

「部外者だからだ」

更に反逆者だからか。けれど何と言われようと、絶対に退く訳にはいかない。

「それでも私は、アイリーン大尉を人間として、愛しています」

元帥の瞳が少しだけ細くなつたような気がした。

「失礼を承知で私からも申し上げますが」

大將が口を開く。

「先程の通り、アイリーン大尉はマグダラス司祭といる時が一番自然に見えました。どうか決闘を認めてやっていただけないでしょうか」

部外者である俺に、この男はいつまでたっても味方するのだなと思つと、心の中で苦笑がもれる。ただ、どうしようもない親を想うように、悪い気分ではない。

元帥は中身の少なくなつた紅茶のカップを持ち上げて、口元で傾ける。ソーサーに置かれたカップは、空になつていた。

「お前の覚悟を聞きたかつただけだ。最初から決闘は許可するつもりだった」

張りつめていた空気が、息を吐いたように緩む。

「元帥もお人が悪い」

大將は安堵した様子でカップに手を伸ばす。俺は元帥の、メイベルと同じ紫色の瞳を見た。

「感謝致します」

「あの時と同じだ。好きにしろ」

あの時とは何のことだつたかと考えて、円卓での会議を思い出した。トゥーシャを召喚すると発言した俺に、元帥は確か同じように返事をしたのだ。

「マグダラス、無論、俺はお前を応援している。これは軍人としてではなく、個人としてだ」

俺は純粹に驚いて大將を見た。明らかに失言の域だが、大丈夫なのだろうか。元帥へ視線を向けると、元帥は関心がないのか聞かなくなつたふりをしたのか、目を伏せていた。

俺は誇らしげな笑顔を浮かべている大將に向けて、心の中でため息をつきながら、静かに微笑んだ。

本日、拳式が行われる予定の教会は、風変わりな体をしていた。教会の前方、祭壇から参列者が座る長椅子までは特に普通の教会と変わらないのだが、後方は天井のステンドグラスも途切れていて、ただ広い床が続き、高く昇った陽が降り注いでくる。半壊した遺跡のようで、雨の日はどうなるのだろうかと無駄な心配をしてしまった。

聞けば、花嫁を巡る決闘は珍しいことではなく、教会の後方は決闘をするための場所で、軍人の結婚式は必ずこの教会で行うのだそうだ。まさにあつらえ向きの場所である。

教会の後方、軍服の軍人達が壁に沿って四角く整列する真ん中に、白いタキシードを着た男がこちらを向いて立っている。遮るものがない陽の光に白が照らされ、俺は目を細めた。軍人達が作る四角の中へ、歩んでいく。こんなにたくさんの方がいるというのに、杖をつく音と靴音しか聞こえない。

俺はタキシードの男と五メートル程距離をとって、立ち止まった。「久しぶりだな。カイザー・デイビス大尉」

デイビス大尉は不機嫌な表情で、胸の前で手を組む。

「もう貴様は上官ではない。敬語は使わんぞ」

俺は笑った。入隊時は俺の上官であり、途中からは部下だった。相変わらず髪は短く切りそろえられ、軍人の手本のようにないでたちをしている。

「構わない。今の俺は神官だ。決闘を受けてくれたこと、感謝する」

「貴様に負ける気などない」

「デイビス大尉が鋭く俺を睨む。」

「それにしてもあなたがメイベルを好きだったとは、意外だったな。俺がいなくなってから何があつたんだ？」

俺が退役するまで、メイベルはほぼ俺の側にいたはずなので、接点があるとは思えなかった。デイビス大尉の頬が、ここからでも分かる程、紅潮していく。

「貴様には関係ないだろう。俺は彼女が好きだ。でなければ結婚な

ど申し込まない」

俺もこいつのように一直線だったら、こんなややこしいことにはならなかっただろうと思った。まあ、後悔は性に合わないし、今分かってるのは一つだけだ。

「俺も負ける訳にはいかない。俺にはメイベルが必要だ」

「大した自信だな。その足で勝てるとは思えんが」

デビス大尉の冷たい視線が、俺が右手に持つ杖へ向けられる。

ミリアが残した傷痕は、魔法でもっても完全に回復することはなかった。これこそが今までの行いの代償なのだと思っている。けれど、不幸だとは感じていない。

「戦う前から負けを考えてどうする。戦うからには勝つ」

軍人達に囁きの波が伝って、皆外の方を向く。

振り返ると、半壊した建物に縁取られ、春風の中を純白の人影が歩いてくる。俺と同じ法衣を着た神官に付き添われて、女は白いヴェールの下で伏し目がちに地面を見つめていた。

教会の中に入ってきたところで、うつむいていた紫の目と、目が合った。紫の目が開いて、桜色の口紅を引いた唇が開く。

「大佐？ あ、いえ、マグダラス、司祭」

メイベルは叫びかけた声を、呼び慣れない呼称に変える。どうやら決闘のことはメイベルにだけ知らされていなかったようだ。そういえば俺も連絡するのを忘れていた。

メイベルは花嫁らしく胸元が開いた純白のドレスを着ていて、下ろされた波打つ長い黒髪が白い肩にかかっている。

「お前をかけてデビス大尉と決闘することになった。すまないがちょっと待っていてくれ」

メイベルの表情が驚きと猜疑の混じったものになる。

「何を言ってるんですか？」

「俺にはお前が必要だ。だから決闘を申し込んだ」

「決闘って、その足じゃ」

俺はメイベルの名前を呼んで、言葉を遮る。

「お前にも俺が必要なはずだ」

咳払いが聞こえて、俺は振り返る。

「無駄話はもういいだろう、マグダラス司祭。始めるぞ」

デビス大尉はわずかにメイベルへ視線を動かして、俺へ向き直った。

俺とデビス大尉の側へ神官が進み出てきて、俺の杖を受け取ると、短く何か唱える。透き通った玉虫色の壁が俺とデビス大尉を四角く囲う。

外側には変わらず俺達を取り囲む軍人達の四角い壁、その中に一人だけ、純白のメイベルがいる。メイベルは驚いたような、泣きそうな珍しい顔をしていた。

『お前らしくない』

声を出さずに言っつて、笑っつておいた。

「ルールは手紙で伝えた通りだ。使えるのは魔法のみ、体術はなし、武器も道具もなし、膝をついたら負けだ」

俺の言葉を受けて、デビス大尉は手首の骨を鳴らす。

「手加減などしないぞ」

「そのつもりだ」

防御壁の外側に若い神官が歩み寄ってくる。咳払いを一つして、叫んだ。

「始め」

デビス大尉は動かない。俺も向こうの呪文が完成するより早く、呪文を唱えなければ。

空気を切る音がして、デビス大尉が駆けてくる。

『透の空気 火 塵』

デビス大尉の手が淡い光を帯びる。

『透の空中 飛 空 風 以って我が身に舞い降りれ スイル』

『以て我が手に立ち昇れ ニーロ』

熱を感じる程近くに飛んできた炎を寸前で横に避ける。

「なるほど、そう来るか。少しは持ちそうだな」

デイビス大尉は距離をとり、笑う。

スイル（飛行呪文）を唱えたのは空を飛ぶためではなく、体を少しだけ浮かせて、常人と同じ速さで移動できるようにするためだ。軍人時代には使えなかった呪文だが、足が不自由になってから習得した。俺の実力では制御レベルも知れているし、持って数分だ。勝てる見込みは低い。けれど、負ける訳にはいかない。

『透の空気 雷 塵』

デイビス大尉と距離を詰める。移動で、体の中の魔力が削り取られていくのが分かる。

『透の水面 水 気』

デイビス大尉は呟いて、動かない。

『以て我が手に迸れ ワプラ』

『以て我が手に溢れ出せ オスタ』

デイビス大尉の目の前で放った雷は、水球に阻まれ派手な光と音を散らす。

『透の空気 雷 塵』

『透の空気 火 塵』

俺とデイビス大尉はほぼ同時に口を開く。

『以て我が手に迸れ ワプラ』

『以て我が手に立ち昇れ ニーロ』

呪文を叫ぶ声と共に、目の前で光と熱が爆発した。音と風圧を受けて、背中を思い切り叩きつけられた。

咳込むと、くらんだ視界に対角の防壁に背をつけているデイビス大尉の姿があった。今のはほぼ互角だった。

『透の空中 飛 空 風』

スイル（飛行呪文）の効果が切れていることに気付いて、早口で呟く。吹き飛ばされて集中を切ってしまったことを今更悔やんだ。

この状況は、まずい。

「させるか」

デイビス大尉は叫び、よろけながらもこちらに駆けてくる。

『透の空中 風 塵 以て我が手に巻き起これ アリス』

『以つて我が身に舞い降りれ スイル』

体が浮き上がった時、吹いてきた突風におさえつけられ、俺は顔をかばう。

『透の空中 風 塵』

『透の空気 火 塵』

重なり合う呪文が、俺の方が早い。

風がやんで目を開けた時、目の前にデイビス大尉の姿はなく、視界の真横に入った影に手の平を向ける。

『以て我が手に立ち昇れ ニーロ』

『以て我が手に巻き起これ アリス』

風を放つより一瞬早く、目の前に炎が広がった。皮を引きはがされるような痛みが全身をなぶる。耐えられず呻き声を上げていた。

『透の空気 火 塵』

かすむ視界に、デイビス大尉が俺の隣で手を向けているのが見える。逃がっている暇などない。

『透の空気 雷 塵』

呻きを殺して、早口にまくし立てる。

『以て我が手に立ち昇れ ニーロ』

『以て我が手に進れ ワプラ』

呪文は、間に合った。ただ、力の抜ける感覚がなく、目の前が真っ赤になって、俺は叫びながら、世界が千切れて暗くなっていくのを見ていた。

体が湯につかったような温かさを感じた時、戻ってきた視界の中で、審判の若い神官が仰向けになった俺の体に手を当てていた。神官は俺と目を合わせると、安堵したような表情になり、立ち上がる。

「勝者、カイザー・デイビス大尉」

遮るもののない場に、声が高らかに響く。

抑えられていたように静まっていた空間にまばらな拍手が響き、

大きくなり、歓声が加わる。俺は上体を起こして、側に立っている
デイビス大尉を見上げた。

最後の呪文は確かに完成していた。けれど、発動できるだけの魔力が残っていないかった。最後の呪文をまともにくらべてしまい、気絶したという訳か。そこがスイル（飛行呪文）を使い続けていた俺と、デイビス大尉の違いだろう。

デイビス大尉は胸の前で腕を組んで、俺を見下ろす。

「見事だった。足の障害がなければ違っていたかもしれない」

俺は静かに、笑った。絶対に負けてはいけない戦いに負けてしまった、自分に対しての嘲笑だったのかもしれない。

「そんな可能性のないたどえ話はいらない」

俺は立ち上がった。少しめまいがするが、歩けない程ではない。神官から杖を受け取って、俺はデイビス大尉を振り返る。何か言いたかったのだが言葉がなく、俺はそのまま出口へ体を向けた。

軍人達は残らず俺を見ている。自分から言い出した勝負に負けたのだから格好がつかないが、負けは負けだ。俺は賭けに、勝てなかった。

出口の側に純白のドレスを着たメイベルの姿があつて、近付いていくと、広い空間に杖の音がよく通った。ヴェールに包まれてあまり表情の分からないメイベルの前に、立った。

「お前のことは好きだ」

メイベルは動かない。俺の目を見つめたまま、離さない。

「幸せに」

俺はメイベルの目から、逃れた。出口へ向けて歩き出し、大きな衣擦れの音が聞こえて、俺は杖を持った右腕をつかまれた。危うくバランスを崩しそうになって振り向くと、メイベルが泣く寸前の、怒られた子供のような表情で俺を見上げていた。桜色の唇が開かれて、泣き出すのかと、思った。

「馬鹿、馬鹿ですか」

残念ながら、華やかな格好に似合わない罵声だった。

「何がだ」

「全部です。最初から最後まで」

「そんなに叫んでいいのか。軍人達のイメージが崩れるぞ」

「別にイメージなんてどうでもいいです」

メイベルは急に気付いたように俺の腕から手を離す。

「何が駄目なんだ？ お前に何も知らせなかったのは謝るが」

「それが問題なんですよ。何で結婚してほしいくないなら私に言わないんですか」

「言ったとしても、決闘はするつもりだった。軍内が納得するとは思えないからな」

「その足で勝てると思ったんですか？」

メイベルの声から怒気が抜けて、真剣なものになる。

「もちろん勝つつもりだった。だが、負けた。俺は自分が思っている程、強くなかったということだろう。悔しいが、自分でした約束だ」

メイベルはうつむいて目を伏せる。白い手袋をした手が、ドレスをつかんだ。つかんだ指先が、これ以上ないくらいにきつく握りしめられているのが、見て取れた。

「メイベル、今、幸せか？」

メイベルは顔を上げた。ヴェールでよく見えなかったが、紫色の目は、確かに薄く涙で覆われていた。

俺は約束は守ることにしている。自分で言い出したなら尚更だ。だが、本当にお前が望んでいるのなら、約束を破っても、いいと思っただ。

俺はメイベルの表情を覆っている薄いヴェールに手をかけた。遮るものがなくなった大きな紫の目がこちらを見上げる。何か言われる前に、メイベルの頬から首筋へ手の平を滑らせて、桜色の唇に唇を合わせた。

長年側にいたのに、今こうしていることが、不思議だった。

唇を離すと、メイベルの頬には涙が伝っていて、俺の顔を見るな

り、声を上げて泣き出した。

「嫌だったか？」

発した自分の声は意識せず動揺していた。メイベルは顔をうつむけて首を横に振る。では、何で泣くのだろうか。

単音の靴音が近付いてきて、デイビス大尉が俺とメイベルの側までやって来る。怒っている風ではなく、真剣な目で俺を見つめてくる。

デイビス大尉がメイベルへ視線を落とすと、メイベルは顔を上げて唇を引き締める。多分言葉を発しようとしているのだが、涙がこぼれ落ちて、喉で押し殺した声が聞こえた。デイビス大尉はメイベルの頬に手を伸ばして、涙の筋を拭う。

「分かりました」

微笑んだデイビス大尉に、メイベルは泣き顔で表情を崩す。

「ごめんなさい。私は、大佐を」

デイビス大尉は睨むような視線で俺を振り向く。

「マグダラス司祭、お前の勝ちだ」

「謝らないぞ」

「別に期待していない」

お前なら何をすればいいか分かるだろうとでも言いたげな顔に、俺は微笑を返す。

「行くか、メイベル」

すっかり泣きはらした目に見上げられ、俺は杖を腕にかけてメイベルの足元へかがみこむ。「大佐？」メイベルがわめき出す前に、俺は花嫁を抱き上げた。短い悲鳴がこだまする。

「何してるんですか、足が」

「別に杖がなくても歩ける。あつた方が楽なだけだ」

「駄目です、怖いし降ろして下さい」

「落ちたくなかったら大人しくしてろ」

メイベルは閉口して、涙のにじむ目で俺を睨みつける。

「どうして、いつもそうなんですか」

「何のことだ。驚いて泣き止んだら」

「そうですね、それは別です」

足を踏み出すと、意外と普通に歩くことができた。もしかして杖に頼りすぎていたのかもしれない。スイル（飛行呪文）なしで戦えば勝てたかもしれないが、今となっては重要ではないだろう。

「重いな。ドレスが」

「遠まわしに喧嘩売ってるんですか」

「そういう訳じゃない。女は割と肉がついてる方が好きだ」

「そういうことを公衆の面前でさらりと言わないで下さい」

俺は笑った。やはりこういう風に笑うのが一番心地いい。

「じゃあ二人きりになるか。覚悟しておけよ」

「何の覚悟ですか」

叫ばれて、俺はやっと元の場所へ帰ってきたのだと、思った。

「いい加減、降ろして下さい」

メイベルの声にはあまり勢いがなく、どちらかといえば本当に恥ずかしくっているようだった。

「重いとが言っただくせに歩きすぎです。自分で歩きますから」

「別にお前が重いとを言っていない」

「ドレスが重くても同じじゃないですか」

「まあもう少し我慢しろ。ああ、あそこだな」

教会を出て割と裏道を通ってきたが、さすがにまったく人と会わなかった訳ではなく、道行く人々の注目を思い切り浴びた。何しろ神官が花嫁を抱いて歩いているのだ、意味が分からない。

「桜、ですか？ 好きですね」

メイベルが俺の視線の先をたどる。

軍本部の近くで、散歩という仕事放棄のためよく来ていた桜並木だ。あまり広くない道の両端に桜の木が植えてあって、風が吹く度花びらを降らせている。大分葉桜だが、逆に人がいなくていいだろう。

桜に挟まれた道の真ん中で、メイベルを降ろしてやった。

「恥ずかしかつたです。何考えてるんですか」

「お姫様抱っこされるのは女の夢じゃないのか」

「知りませんよ、そんな夢」

メイベルは道の端へ歩いて行って、桜の枝に触れる。

「これ、いつも見てるやつと違いますね」

「種類が違うからな。咲くのも少し遅い」

メイベルは納得したような声を上げる。

「確かにいつもの桜はもう散ってますもんね」

「桜好きか？」

メイベルは俺を振り返って微笑む。

「好きですよ。嫌いな人もあんまりいないと思いますけど」

「お前、俺のことが好きなのか？」

メイベルは唇を薄く開いて、動きを止める。思い出したように表情を変えて、眉を寄せて唇をゆがめていく。心なしか頬も赤くなっているような気がする。

「何ですか、その誘導尋問みたいなの」

「別にそういう訳じゃない。念のため聞いたただけだ」

メイベルは口を結んで、納得のいかなさそうな目で俺を見ている。

「というか、大佐こそ私が好きだったんですか？」

「お前のことを好きなのはもう何年も前から言ってるだろう」

「そういうのじゃなくて、恋愛感情で好きだったのだったことですか。こっぴつ問答はあまり得意ではない。眉間に力が入っていたことに気付く。」

「正直、俺は恋愛感情かそうでないとかは分からない。好きは好きで嫌いは嫌いだ。お前のことは人間として愛している」

メイベルは抗議するように、真剣な目で俺を睨んでいた。

「じゃあ何でこのタイミングで言うんですか。これじゃ、ただ取られたくないおもちやを取り返しに来た子供みたいじゃないですか」

確かに、結婚の話聞いてテレエに怒られるまでは、行動を起

こそうと思わなかった。けれどあの瞬間、形になったものは。

心臓の内側から、温かいものが流れて、体を締めつける。この感覚は、分かっている。言葉にしなければ、伝わらない。

俺は、俺をまっすぐに見つめるメイベルの頬に、手を添わせる。

「これが何なのか、今までよく分からなかった。お前の結婚の話の後に気付いただけだ。お前も迷ってたから結婚を断らなかったんだろ？ お互い様だ」

俺はメイベルの頬を軽く叩いた。

「お前が必要だ。それが、俺の『好き』だ」

メイベルは紫の目を丸くして俺を見つめていた。白い頬が染まっ
ていって、しおらしく瞳が伏せられる。そのうちにメイベルは俺の
手を押しやって、桜並木の方へ歩き始めた。淡い花の色に純白のド
レスが溶けて、風の中で振り返る。

「分かりました」仕方ないといった顔で、微笑んだ。「私も、あな
たの側にいます」

俺はメイベルに歩み寄って、背中から抱きしめた。

「そうしてくれ」

触れている部分が、温かかった。ああ、俺はずっとこれがほしか
つたのだ。胸の中が温かい流れでいっぱいに満たされる。

「ふと思っただが」

「何ですか」

「そんなに恋愛感情かどうか疑わしいなら、抱くぞ。今すぐに」

メイベルから返事がなくなる。のぞきこんでいないので、表情も
分からない。

「嫌か？」

「あの、嫌とか言うより笑えませんか。道の真ん中でそんなこと言わ
ないで下さい」

「俺はいつでも本気だ」

「ってどこ触ってるんですか、殺しますよ」

ものすごい剣幕で振り返ったメイベルの頬と耳は赤く染まってい

た。

「まあ、そうだな。まだ昼だしな」

「そういう問題じゃありません」

俺はメイベルの両肩をつかんで、正面へ向けさせる。

「安心しろ。お前のことは人間として、丸ごと、愛している」

「それはどうもありがとうございます」

恥ずかしいのか怒っているのか、メイベルは視線を横にずらして眉を寄せている。

「俺のことは好きか？」

メイベルはためらったように目の形を変えて、視線をずらしたまま口を開かない。ずらされた視線の先へ顔を持っていくと、驚いたように顔を引かれた。

「言いませんよ、待ってても」

メイベルは噛みつく犬のように叫ぶ。

「そうか。じゃあ今晚ゆっくり聞かせてもらうことにしよう」

「死んで下さい」

今度は逃げられないように、強く抱いた。胸に満ちる温かいものを言葉にしようと思ったが、やめて、違う言葉を囁く。メイベルは恥ずかしさに耐えられないというように、小さな声でうなっていたが、やがて礼を言った。

「言い返してくれていいぞ」

「言いませんよ」

思い切り叫ばれて、笑った。

俺は腕の中にある熱を離さないように、頬を寄せて、きつく包みこんだ。

2 (後書き)

あとがき - 潔白 -

おはようございます。眠いです。今回書きたいことがたくさんあるので、何だか書けそうです。と思ったら電車が車両故障で止まりました。長丁場です。書けっことですね。頑張ります。結局一駅歩きました。

今回、この話が浮かぶまでは、私の中で兄とメイさんは90%くつつかない予定でした。何か無理だった。けれどとある日、突然神が降りてきて、結婚式をめぐる話を書きなさいということになりました。人生って不思議ですね。電波ではなく。

昔から、物を書くというのは私が登場人物の動きを見て外側から書き記すという作業だと思っているのですが、どの程度行動や気持ちを読み切れるかは私の力量にかかっている訳でして、今回、兄の気持ちがあんまり読めませんでした。最初は。一度書き終わって、読み直している時に違うと気付いて大幅に書き直しました。登場人物が動いていても、結局読み取って文字にするのは私なので、読み間違えると全然違う方向にいくのねと思いました。

まったく話は変わりますが、話の筋を考える時、世界を作るということで神様を疑似体験している訳で、好きな人に程試練を与えなくなるので、神様もきつと好きな人に程波乱万丈な人生を与えてるのねと思ったりします。自分の世界を作る時、私としてはやっぱり好きな人には波のある人生を送ってもらわないとつまらないもの。私の中の神様像はどうやらSらしい。ちなみに全然宗教は関係なく妄想です。

それゆえ兄は波乱万丈な人生を送ってるんだと思います。でもとうとう幸せになってお母さん（注：私）一安心ですよ。（いやでもらぶらぶする前から幸せだったって言ってますね。本文で。）超余談ですが子供はたくさんほしいらしいです。これからもきつと幸せだと思つよ。

今回、兄ハイン、妹ミリアからの脱却ということで、テレーゼさんが当て馬になってしまいました。ごめん、嫌いじゃないしむしろ好きなんだけど、君にはもつといい人がいると思うよ。

「兄、キスしてる時に他の女の人のこと考えてるの酷いよね」と某方に話をしたら、「兄らしいね」と言われました。そうだったのか。最後に付け足しですが、今回兄に魔法を使わせたくて魔法バトルをさせました。二人共弱い魔法しか使えないのであれですが……。本編中というか今まで一回も魔法使ってるところを見たことがなかったので満足です。実は使えるんだよ。実戦ではほぼ使う機会ないけど。

書き終わった直後は、子供を嫁かみよめに出す親の気持ちってこんなかと思っていたのですが、今は幸せになってよかったねと思います。メイさんのことにまったく触れてませんが、二人共お互い必要だと思つよ。

それでは最後にお母さん（注：私）から。末永くお幸せに。

2010/10/11 くらい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7467x/>

ラヴィング-純白-

2011年10月25日08時10分発行